
Devil May Cry 4 StrikerS

ネロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil May Cry 4 Strikers

【Nコード】

N0388Y

【作者名】

ネロ

【あらすじ】

魔剣教団教皇が起こした「救済」が2人のデビルハンターに阻止されてからから1年余りが過ぎた。そのデビルハンターの1人である青年ネロはその後悪魔を狩り続けていたが、ある日依頼の後、拾った一つの赤い宝石によってネロの新たな戦いが始まった。

M i s s o n : 1 転移 (前書き)

自分の中で一番やってみたかった小説です！この組み合わせはありますが、似た感じにならない様に気を付けます！ 『M a g i c a l T r i g g e r』、『D e v i l M a y C r y』《s t o r y s M I D - C H I L D A》『』を書いているk i dさんから許可を頂いて書いています。

とある部屋の机から受話器の古くさいベルの音が鳴り響く。

その音を聞いた1人の銀髪の男が受話器を取り、応答する。

受話器で応答していた男は短い会話をしながらメモを取り、受話器を置いた。

「さて、仕事の時間だ…」

男はそう呟くと紺色のコートを羽織り、机に置いてある銀色の装飾銃を指で回しながら腰のホルスターに収め、部屋の隅に立てかけてあった身の丈程の長さの剣を背中に背負った。

「ネロ…また悪魔の依頼なの？」

仕事の準備をしている男に白い修道服の様な服を着た茶髪の女が声をかける。

「ああ。けど敷地内に現れたんだ。夕方には戻るよ。キリエ」

ネロと呼ばれた男はキリエという女に優しく言った。

「でも、最近依頼が多いみたいだから……」

キリエが俯きながら言う。

「仕方ないさ。悪魔を野放しにしたら、他の人にも危険が及ぶ。そ

の悪魔を狩れるのは俺しかないんだ。わかってくれよ」

ネロが言い聞かせる様に言う。

「うん、わかってる。なるべく早く帰ってきてね」

キリエは心配そうな声でそう言った。

ネロが左手を挙げながら返事をする。

「じゃあ、行ってくる」

キリエも心配な気持ちを抑えながら返事をする。

「いつてらっしゃい」

依頼はいつもと同じだった。

「確か港の方って言ってたな」

先程書いたメモを見ながらネロが呟く。

市街地から商業区を抜けると港がある。ネロの住んでいる街、城塞都市フォルトウナは外界とは隔離された街で島の面積もそう広くはない。

故に市街地から港までは案外簡単に行けるのだ。

「ここか……？」

依頼内容を書いたメモを見ると港の倉庫と書いてある。

倉庫内に入ってみるが、誰もいなかった。

しかし、ネロにはここに標的がいると言える確信があった。

「間違いなさそうだな…」

ネロがそう呟くと、倉庫の天井から無数の黒い影が飛び降りてきた。しかしネロはそれがわかっていた様に横に転がり、飛び降りてきた黒い影から距離を取る。

ちなみにネロが狩るのは鳥でも動物でもない。

「不意打ちか。ま、お前らしいけどな」

ネロの前に現れたのはズタ袋を着た力カシに手足に巨大な刃物が取り付いた様な化け物、俗に言う『悪魔』である。

「『スケアクロウ』か…拍子抜けだな」

ネロは苦笑するとスケアクロウと呼ばれた悪魔に向かって突進すると、スケアクロウの顔面目掛けていきなり回し蹴りを決めた。

ブーツの踵が思い切りめり込んだスケアクロウは後方へと吹っ飛ぶ。それを見た他のスケアクロウが手足の刃物を振り回し、ネロへと飛び掛かっていった。

しかしネロはそんな攻撃もお見通しだと言わんばかりに背中の大剣
レッド

クイーンで向かってきたスケアクロウ全ての攻撃を受け止めた。

無数の刃物とレッドクイーンが衝突し、火花が散る。1対多数。傍
から見ればネロが圧倒的に不利に見える。

しかしネロはその状況に屈する事は無かった。

「ハハッ！」

即座にスケアクロウの刃物を押し切りつつ、レッドクイーンの柄を
捻る。その瞬間、レッドクイーンの峰から大量の炎が噴き出し、
轟音をあげながら向かってきたスケアクロウ全てを後方へと吹っ飛
ばした。

ネロの持つ大剣レッドクイーンには『イクシード』と呼ばれる剣撃
の速度を向上させる機能が搭載されている。

剣の柄がバイクのアクセルのようになっており、それを捻る事で装置
が燃焼、柄の根本にあるクラッチレバーを握る事で峰から推進剤が
噴射されるのだ。

しかし、レッドクイーンはネロ専用推進剤の噴射量を限界まで高
めるという改造が施してあった。想定外の噴射の所為で推進剤と共
に大量の炎が吹き出してしまう。

この改造を施されたレッドクイーンは一般の人間が扱う事は不可能
で、人並み外れた戦闘能力と天性の感を持つネロに扱えない程に凄
まじい推進力を持つてしまっていた。

ネロはイクシードの燃烧を促しながら、吹っ飛んだスケアクロウへと間合いを詰める。

飛ばされたスケアクロウも起き上がり、ネロの方へと詰め寄っていた。

ネロはクラッチを握りながらレッドクイーンを横薙ぎに振るう。スケアクロウの柔らかくブヨブヨした身体にレッドクイーン刃がめり込む。

「Die！（死ね！）」

叫び、剣を振るいながら柄を捻ると燃烧を促されたイクシードが大量の炎と共に噴射される。

その勢いで周囲に群がるスケアクロウを倉庫の隅へと吹き飛ばす。

その勢いを利用し、吹き飛ばされたスケアクロウに更なる追撃を掛ける。

炎と共に斬り付けられたスケアクロウは黒い霧をまき散らしながら消滅した。

残った数体のスケアクロウは腰のホルスターに収納してある装飾銃『ブルローズ』で処理した。

この銃も対悪魔の為にネロが様々な改造を施している。

最大の特徴は縦に並んだ2つの銃口だろう。

発砲と同時に発射された2つの弾丸がスケアクロウに命中し、白濁とした液体を飛び散らせながら、次々と消滅していく。

消滅したスケアクロウのいた場所に見慣れない赤色の六角形の石が落ちていたのだ。

「何だこりゃ………？」

ネロがそれを右手で拾い上げると、包帯を巻き、グローブを着けた右腕が突然疼いた。

次の瞬間、赤い石が強烈な光を放ち、ネロの姿はフォルトウナから消えた……

M i s s o n : 1 転移 (後書き)

難しい…この一言に尽きます。戦闘描写とか書いた事があまり無いので……

感想とかお待ちしております！

Mission:2 邂逅

「ぐっ……」

目を覚ますと、そこは見た事の無い土地だった。

「何だここは……？俺は港の倉庫の中にいたはずだ……」

身体を起こしながらここまでの事を思い返した。

いつもの様に悪魔討伐の依頼を受け、港の倉庫内にて、悪魔を討伐、その後見た事のない赤い宝石を拾って意識が途切れたのだった。

「そういえば……あの石はどこに……」

ネロはそう呟き不意に右腕を見る。

右腕の袖を肘の辺りまで捲り、グローブと包帯を取ると、そこには人の腕ではない異形の右腕があった。

鱗のような外殻で、手の甲から肘の付近まで亀裂が走っており、その亀裂からは青白い光がぼんやりと光っていた。

指先の爪も尖っており、まさしく「悪魔の腕」と呼ぶに相応しい腕だった。

「やっぱりここにあったか…」

ネロが赤い宝石をイメージすると、右手に先程拾った赤い宝石が現れた。

「普通に考えて、こいつのせいでこんな事になったんだよね…」

ネロが溜め息をつく。

周りを見回すと、どうやら森のようだ。

人の手が入っていないのを見るとどうやら森のど真ん中らしい。

「まあ、フォルトウナじゃないらしいな」

ネロは空に昇っている2つの月を見てそう呟いた。

ネロの住んでいるフォルトウナでも時折紅い月が昇る事があったが、流石に月が2つ昇るなんて事は無かった。

「取り敢えず、人がいればいいんだけどな…」

人がいればここがどこなのかを聞き出せるかもしれない。

幸い武器は1つも掛ける事なく揃っている。

万が一戦闘する事になっても問題はなかった。

しかし、一番厄介な問題が1つだけあった。

帰る方法がない。

キリエにはすぐ帰ると言ったがそれも怪しくなってきた。

「取り敢えず、身体を休める場所探さないとな」

赤い宝石を右腕に吸収し、ネロが歩き出した時……

ガサッ！！

「!？」

ネロの目の前の茂みから物音がしたのだ。

右腕は疼いていないから悪魔では無いようだ。

悪魔が近くにいる時、ネロの右腕は必ず疼くのだ。

「（悪魔じゃないみたいだが、嫌な感じだな……）」

ネロが心の中でそう思ったとき、茂みの中から”何か”が飛び出してきた。

「チッ！」

慌てて飛び退き、飛び出てきたものから距離を取る。

ソレはボディに複数の目の様なものを持つカプセル型やボール型のロボットだった。ボディからは黒い無数のアームが飛び出ており、お世辞にも気持ちのいい外見ではなかった。

「悪魔：じゃないみたいだが、お友達になりたいって感じでもなさそうだな」

ネロがロボットの群れに言葉を投げかけると同時に、ロボットは目の様な部分から青いビームをネロに向けて発射する。

「……ハッ！」

その攻撃を横に転がり、難なくかわすネロ。
それを見たロボットはネロに向けて無数のアームをネロに向けて延

ばす。

その攻撃を背中に背負ったレッドクイーンで弾き飛ばす。

「ハッ！喧嘩がしたいなら他所へ行けよ！」

レッドクイーンによつて弾かれたアームはそのまま1体のロボットのボディに当たり、そのロボットが周りのロボットを巻き込んで横転する。

「If you want a fight, then come on!（本気でやる気か？来いよ!）」

地面に突き立てたレッドクイーンの柄を捻り、ロボット達を挑発するネロ。

本来なら喧嘩などしている場合ではないが、相手が襲ってくるなら仕方が無い。

ロボット達がボディを起こしながらビームをネロに向けて一斉発射する。

「馬鹿の一つ覚えだな…」

そう呟きながら、跳び上がり、ビームによる攻撃を回避する。

同時にレッドクイーンの柄を捻り、イクシードを燃焼させる。

「Be gone!（失せろ!）」

叫び、クラッチを押し込むと、峰から大量の炎と共に推進剤が噴出する。

その勢いに任せ、ネロはレッドクイーンでロボットのボディを天辺から一気に両断する。

両断されたロボットはショートし、爆発する。

それを見たロボット達がネ口を取り囲む様に移動する。

「そういう所は”アイツ等”にそっくりだな！」

レッドクイーンを背負い、腰のホルスターに携行しているブルーローズを構える。

「さっきのビームのお返しだッ！」

そう言いながら、正面のロボットに向けてブルーローズの弾丸を发射する。

銃口から放たれた2発の弾丸は狙った標的に当たった。

銃弾を喰らったロボットは先程両断されたロボットと同じ様に爆散する。

ロボット達が青白い光の結界の様なものを展開させる。

「あ？」

攻撃を防ぐバリアの様なものだろうか？そう思いネ口は試しにブルーローズを発射する。

銃弾は結界を貫通し、そのままロボットに直撃する。

「ただの飾りか？」

ブルーローズを指で回しながらホルスターに収め、レッドクイーンに武装を切り替え残りのロボット達を殲滅していく。

レッドクイーンの攻撃も、ロボットの結界のようなものの干渉を受

ける事は無かった。

数分後、ネロは銃弾で撃ち抜かれ、剣撃の痕が刻まれた無数のロボットが積み重なった山の上に立っていた。

「呆気ねえな……」

左手でレッドクイーンを背中に収め一息つく。

「さてと…」

襲ってきたロボット達に物足りなさを感じつつも、ネロがロボットの山から降りようとした時、妙な気配を感じた。

「さっきの奴らとは違うな…。これは”人”か？」

ネロが不意に空を見上げると、確かに“人”がいた。

どうやらこちらに視線を向けており、視線を外さぬまま、地面に降り立つ。

「時空管理局、機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。武装を解いて、私と一緒に来てください」

黒い軍服の様な服装、その上に白いマントを羽織り、手には黒い戦斧の様な形の杖を持った金髪をツインテールにした女が話しかけてきた。

「どうした？テストロッサ」

金髪の女…フェイトを追う様にして彼女と同年くらいの桜色の髪を一つに束ねたポニーテールに濃い桜色の服装に淡い桜色のジャケットを羽織った女が降りてきた。

ポニーテールの女は積み重なっているロボットを見た後、隣にいるネロに視線を移した。

「私は機動六課ライトニング分隊副隊長のシグナムだ。悪いが私達と一緒に来てもらおうか」

状況がよく解らなかったが取り敢えず考えてみた。

訳の分からない場所に居て、突然の襲撃を受け、その後、空から降ってきた女2人に一緒に来いと言われた…

人を探すのが目的の1つだったがこんな得体の知れない連中の言う事を聞く程ネロは素直じゃなかった。

「嫌だつて言ったら？どうする？」

ネロが不敵に笑い返答すると、ポニーテールの女…シグナムもすぐに言葉を返した。

「悪いがそう言うわけにもいかなくな…。ガジェットを破壊したのはデバイスではなく質量兵器だな？何故お前の様な者がここにいるのか…色々聞きたい事がある」

「それにそのガジェットはロストロギアに反応して動くんです。あなたまさか…レリックを持っているんですか？」

取り敢えず、このまま逃がしてくれるという雰囲気ではなかった。しかし、何を言われようとネロの返事はもう決まっていた。

「だったら、力づくでやってみるよ…！」

背中からレッドクイーンを抜き、切先をフェイト達に向ける。

「いいだろう…」

シグナムはそう言つと、神速とも言える速さでネロとの間合いを詰め、愛剣レヴァンティンを鞘から抜き、ネロに斬り掛かった。しかし、その攻撃はレッドクイーンによって止められていた。お互いの刃が衝突し、火花が散る。

「何だと!？」

「予想以上に速いな…けどなっ！」

ネロがシグナムに蹴りをいれる。

「ぐっ！」

蹴りを入られたシグナムはネロから距離を取った。

「シグナム！」

フェイトがシグナムに駆け寄るが、シグナムはそれを左腕で制した。

「テストロッサ…これ以上は無駄だ。こうなったら奴を気絶させてでも連れて行くしかない…」

シグナムがレヴァンティンを構える。

「どうした？2人まとめて掛かって来いよ？」

ネロがレッドクイーンを地面に突き立て柄を捻る。

「その必要は無い。お前1人を捕らえる事など、私1人で十分だ！」

「言ってくれるじゃねえか！まあ、そう来なくちゃな……」

再びお互いの剣が衝突する。

「あのロボットを俺が壊した事に怒ってんのか？生憎、俺も襲われた身でね……正当防衛って事にしてくれよ！」

「そんな事はどうでもいい。私達の目的は貴様の持っているロストロギアだ！」

「ロストロギア？」

お互いに剣を離し、間合いを取る。

同時にお互いに相手の事を分析していた。

「（こいつ、本当に女かよ……腕力も剣の腕も相当のモンだな……）」

「（リミッターが掛かっているとはいえ、この私を左手一本で相手にするとは……この男できる！）」「レヴァンティン、カートリッジロード！」

魔力を込めた弾丸が剣の峰から排莢され、レヴァンティンの刀身に炎を纏う。

「なっ…!？」

ネロもレッドクイーンの柄を限界まで捻り、イクシードをフル燃焼させ、シグナムに正面から立ち向かう。

「紫電一閃!!」

「Crash! (壊れる!)」

炎を纏った剣と剣のぶつかり合いの中、徐々に押され始めたのはネロの方だった。

「何!？」

シグナムの攻撃により、レッドクイーンはネロの手から外れ、近くの樹に突き刺さった。

慌てて、シグナムから間合いを取ろうとするが、勢いを殺せなかったシグナムの一撃がネロの眼前へと迫っていた。

「チッ!」

舌打ちをしたネロはコートのポケットから右手を出し、シグナムの剣を掴み上げた。

「なっ!？」

それを見たシグナムが顔をしかめる。

「その腕は……」

後ろで戦闘を見ていたフェイトもネロの右腕を見て驚く。

「まさか、こいつを使う事になるとはな……」

「貴様……！」

シグナムが後方に下がり、ネロとの距離を開ける。

「その腕は一体……」

フェイトがネロに問う。

「こいつか？こいつは悪魔の右腕。俺はそう呼んでる」

「悪魔？」

ネロの言葉に2人は困惑する。

「貴様…ふざけているのか！」

シグナムが怒鳴る。

「ふざけてるも何も……」

不意にネロが言葉を切り、腰のホルスターからブルーローズを抜き、発砲する。

シグナムとフェイトが身構えるが、発射された弾丸は2人の間を縫

い、2人の背後にいたスケアクロウへと命中する。
周囲に目を向けると、3人の周りを無数のスケアクロウが取り囲んでいた。

「これは…アンノウン？」

「アンノウン？」

フェイトの言葉にネロが反応する。

「貴様、”アレ”を知っているのか？」

シグナムがレヴァンティンを構えながら問う。

「知ってるも何も……」

言いながら、ネロはブルーローズの空薬莢を排出し、新たな弾丸を装填する。

同時にネロの右手が淡い光を放つ。

「こいつらが悪魔だよ！！」

銃に右手を添え、弾丸を発射する。

魔力を込めて発射された弾丸は正面のスケアクロウへと飛んでいく。スケアクロウの顔面に弾丸が命中すると、弾丸は轟音と共に爆ぜた。周囲のスケアクロウがグレネードを思わせる爆発に巻き込まれ吹き飛ぶ。

それを見た2人は啞然としていた。

「アンタ等が何を知りたいのかは知らないが、今はコイツ等をぶっ

潰すのが先だろ……」

ネロが銃をスケアクロウに向けながら言う。

「そうだな… 貴様には色々聞きたい事があるが… それはコイツ等を斬り伏せてからだ！」

シグナムが向かってくるスケアクロウを斬り飛ばす。

「シグナム！ そんな……」

フェイトが慌てる。

「おい！ フェイトだっけか？」

ネロが銃でスケアクロウを吹き飛ばしながらフェイトに呼びかける。

「え？」

「戦う戦わないはアンタの自由だが、そこに突っ立っていると死ぬぜ？」

ネロが不敵に笑う。

「奴の言う通りだ。 テスタロッサ、話を聞くのはコイツ等を始末してからだ！」

シグナムが炎を纏ったレヴァンティンでスケアクロウをまとめて斬り裂く。

「ああ、もう！」

フェイトは手にした戦斧バルディッシュを鎌状にしてスケアクロウを斬り飛ばす。

「そう言えば名前を聞いていないが……」

背中を合わせたシグナムがネロに言う。

「そう言えばまだだったな……俺の名はネロ……」

言いながら拳を握る。

すると、右腕の隣に巨大な青白い腕が出現する。

ネロが、右手を突き出すと青白い腕がスケアクロウに飛んでいき、胴体を鷲掴みする。

「ただのデビルハンターだよ……！」

叫び、右腕を振り下ろすと、スケアクロウを掴んだ腕がスケアクロウを地面に叩き付けた。

M i s s o n : 2 邂逅 (後書き)

戦闘描写を書くのに慣れてきました。

この調子でどんどん書いていきたいです！

感想お待ちしております！！

Mission:3 悪魔討伐

「俺は…ただのデビルハンターだよ!!」

名乗りながら、デビルブリンガーで拘束したスケアクロウを地面に叩き付ける。

叩き付けられたスケアクロウは黒い霧を飛び散らせながら消滅する。周りを取り囲んでいたスケアクロウも次々とデビルブリンガーに拘束され撃破されていく。

最後の1体を倒したネロは手首を数回降りながら、先程、シグナムに弾き飛ばされ、樹に刺さったレッドクイーンを左手で引き抜き、背中に背負う。

「あなたは…アンノウンの事を知っているんですか？」

フェイトのアンノンという言葉にネロが反応する。

「アンノン？そういえば、さっきもそんな事言ってたな……」

「あなたが今倒した未確認生命体の事です」

「（……なるほどね）」

フォルトウナでは悪魔が頻繁に現れるため、フォルトウナの住民全員が悪魔の存在を知っている。

ここには悪魔が存在しないのだろうか？

と、言っても外の世界には悪魔が現れる事は少ないため、悪魔を知

らなくても何ら不思議な事ではないと、ネロが思っていると、シグナムが口を開く。

「貴様はさっきの未確認生命体の事を悪魔と呼んでいたな」

「ああ…奴らは魔界から人間界に現れて人の命を奪う…最低最悪な奴らだ」

ネロが吐き捨てる様に言う。

「先程の未確認生命体は私達の方では最近になって確認されたんです。あなた…ネロさんの所には頻繁に現れるんですか？」

「ああ…俺の故郷だと毎日の様に現れるな。ちなみに俺はソレを狩るのが仕事だ」

「ネロさんの故郷では先程のアンノ…悪魔とは違う個体も存在するんですか？」

「呼び捨てでいい。さっき倒したのはスケアクロウ。ズタ袋に虫みたいなのが入った雑魚だ」

「今の話を聞くに、貴様は他の悪魔の事も随分と知っているようだな。まだ何か知っている事があるのか？」

「だったら？」

「貴様を連れて行く。そして詳しい話を聞く」

「（またソレか…）」

さっきから同じ返答しか返ってこない事にネロは正直うんざりだった。

「そして、仮に貴様が何も知らないとしても、貴様の持っているその武器は”質量兵器”の様だ。ならばソレを理由に貴様を連れて行く」

シグナムがレヴァンティンを構える。

「あの…私達は今回現れたあの生物の事を何も知らないんです。出来れば、詳しい話を聞かせてもらえませんか？」

武器を構え、痛い程の殺気を放ちながら話すシグナムに対し、フェイトの方は極力相手の機嫌を損ねない様に話していた。

「話す話さない、着いて行く着いて行かないは別として…」

ダルそうにしていたネロが後方に向けていきなりデビルブリンガーを延ばす。

「まずはコイツを始末しないとない！」

ネロがデビルブリンガーで掴んだのはスケアクロウに似た悪魔だった。

しかし、先程のスケアクロウとは比べ物にならない程大きく、手足に付いた巨大な刃物の数も増えていた。

「人が話してる時に割り込むのはマナー違反だろ！！」

デビルブリンガーで巨大なスケアクロウ…メガ・スケアクロウ（以後、Mスケアクロウ）を地面に叩き付けた後、ネロは右足で思い切り蹴飛ばした。

吹っ飛んだMスケアクロウは後方の樹に激突し、地面に倒れる。激突の際に背中の巨大な刃物が当たり、樹はバラバラになった。

「Hoo! C·mon!」

ネロが拳法のような構えをしながらMスケアクロウを挑発する。

起き上がったMスケアクロウは両腕の刃物を回転させながらネロ達に向けて発射する。

ネロはそれを転がってかわし、フェイトとシグナムは防御壁を展開させて刃を弾く。

「さっさと片付けるか…」

呟き、背中のレッドクイーンの柄を捻りながらMスケアクロウに突進する。

「Blast!（吹っ飛べ!）」

イクシードを燃焼させたレッドクイーンを逆手に持ち替え、Mスケアクロウを斬り裂きながら上空へと打ち上げる。

打ち上げたMスケアクロウと共にジャンプしたネロはレッドクイーンによる連撃をMスケアクロウに撃ち込んだ。

空中ではまともに反撃できないMスケアクロウはされるがままに斬られ続けた。

「オラア!」

ネロがMスケアクロウをデビルブリンガーで掴み上げ、空中で数回振り回し、地面に叩き落とす。

「Die！（死ね！）」

再び逆手に持ち替えたレッドクイーンのクラッチを握りながら、炎を纏いながらMスケアクロウの胴体にレッドクイーンを突き立てる。その攻撃を受けたMスケアクロウは不快な声を挙げ、大量の白濁色の液体を飛び散らせて消滅した。

「すごい…」

「これが奴の力か…？」

ネロの流れる様な攻撃にフェイトとシグナムが各々の感想を述べる。

「おい！早くそこから離れろ！」

ネロが突然大声を出し、手にしたレッドクイーンを投げ捨て、フェイトとシグナムの方へ跳ぶ。

急な事態に反応出来ず、2人はネロに押し倒される事で地面に伏せた。

「あなた…一体何を！？」

フェイトが問うと、先程までフェイト達が立っていた場所にMスケアクロウの物と思われる刃物が落下し、地面に深々と突き刺さった。Mスケアクロウは自らの死を迎えると同時に背中の刃物を上空へと飛ばす。

故に倒したと思って油断するとその刃の餌食となってしまうのだ。

もし、ネロが2人を押し倒さなければ、2人は刃によって大怪我をしていただろう…

「助けてくれたのか…礼を言わせてもらっ

起き上がりながらシグナムが礼を言う。

「まあ、無事で良かったな…」

ネロがそっぽを向きながら言う。

「あなた…その傷！」

フェイトがネロの左腕を見ながら叫ぶ。

先程2人を助けた際に斬られたのだろう。

「こんな大した事ねえよ…」

ネロが右腕で左腕を押さえながら言う。

「でも、出血してるし…治療した方がいいです！」

「大した事無いって言ってんだろ……」

ネロは投げ捨てたレッドクイーンを拾い上げ、背中に背負った。

「ぐっ!？」

ネロが顔をしかめ、膝を付く。

「思ったよりざつくりやられたな……」

意識が遠のいていくのが自分でもわかった。

しかし、今倒れたらどこに連れて行かれるかわからない。

そう思いながら、必死に意識を繋ぎ止めようと努力する。

意識が遠のく中、右腕に包帯を巻き、グローブを付け、袖を伸ばし、右腕を完全に隠す。

フェイト達が駆け寄り、何かを叫んでいるのがが見えたが、何を言っているのかはわからない。

ネロの努力も虚しく、ネロの意識は深い闇の中に落ちた。

暗闇の中に俺はいた。

目を閉じると”あの時”の事が鮮明に頭の中に入ってきた。

そう、俺の右腕がまだ人間の腕だった頃、森に現れた悪魔をキリエを守りながら討伐していた時だった。

「キリエ！速く逃げろ！！」

俺が叫ぶと同時にトカゲのような悪魔：アサルトが逃げるキリエに向けて無数の爪を発射した。

「くっ！」

慌てて右手のレッドクインで飛ばした爪を叩き落とそうとしたが、怪我をしている右腕を満足に振るう事が出来なかった俺はアサルトの爪を完全に落としかる事が出来なかった。

落としかれなかった爪の破片の一部がキリエの肩を抉った。

「うおおおっ!!」

叫びながら、アサルートの腹部に銃弾を撃ち込みまくった。
アサルートの死骸が消える頃には肩から血を流したキリエが倒れていた。

「くそっ!!」

怒りに身を任せ、怪我をしている右手で地面を殴りつける。
痛みは感じなかった。痛みよりもキリエを救えなかったという悔しさの方が俺の感情を支配していた。

その日から俺は力が欲しいと願いつづけた。

キリエを…大切な人を守る事の出来る強い力が欲しいと願った。

「まあ、その結果が”コレ”か…」

眩きながら現在の自分の右腕を見る。

自分が力を欲したからか、あるいは別の理由か、俺の腕は悪魔のような腕に姿を変えてしまった。

結局、俺はこの腕で大切な人を守る事が出来たのだろうか？

大切な人を笑顔にさせられたのだろうか？

「キリエ…」

ネ口はそこで目が覚めた。周りを見渡すと、そこはとうやら病室らしかった。

自分の身体に目を向けると、包帯が巻いてあった。

壁に掛かっている時計を見る。

文字は読めないが、時計の角度からして午前3時を過ぎた頃だ。

「まあ、もう少し寝ておくか…」

眩き、目を閉じると、すぐに睡魔に襲われ、ネロの意識は再び眠りについた。

M i s s o n : 3 悪魔討伐 (後書き)

結局ネロって誰の息子なんだろうね？

やっぱり、バージルの息子なのか？

感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0388y/>

Devil May Cry 4 StrikerS

2011年11月3日02時12分発行